

## 龍の伝承、とくに東海地方の龍巻と台風について

吉岡郁夫\*

### いとぐち—龍巻を見る

もう20数年も前のことになる。昭和54年（1979）9月4日、そのころの勤め先の人が亡くなり、その告別式が名古屋市千種区覚王山の日泰寺で行われた。

あいにくその日は小雨のぱらつく雨模様で、式場には南北方向に長いテントが張られ、参列者は2、3列に並んでいた。私は列の後方にいたので、広い境内の東の空が、黒い雲に覆われてするのがよく見えた。大降りになるのではないかと心配しながら眺めていると、雲から垂直に紐のようなものが垂れ下っている。黒雲と地表とが紐によって連っているように見える。このとき、これは龍巻ではないか、という疑念が浮かんだ。

この紐は徐々に近づいてきて、太い柱のようになつた。この柱はキラキラと輝きながらこちらに向かってくる。よく見ると、柱の中には、左下方から右上方へ小さい方形の白紙のようなものを、たくさん巻き上げながら進んでくる。キラキラと光っていたのは、この白いものが雲の隙間から漏れる光に反射しているのだ。これは龍巻に間違いないと確信した。

白い紙片のように見えたものの中には、戸板や立看板のようなものが含まれ、小さいものは白黒の点状に見え、それらが螺旋状に巻き上げられるのが認められた。もし龍巻がそのまま西へ向かって進んできたら、テントも支柱も巻き上げられて、怪我人が出ることは必至である。並んでいた人たちの間から、あーというような声にならない声が漏れた。が、幸いにも、龍巻はしだいに北へ移動し始め、やがて本堂の陰にかくれて見えなくなった。

その日の夕刊の社会面には、龍巻が名古屋市の東部丘陵（尾張丘陵の一部）を迷走しながら北上し、尾張北部で消滅したことを報じていた。被害は比較的少なく、龍巻としては大きいものではなかったようである。

龍巻の印象は衝撃的であった。それはまさに龍の昇天する状況と映った。しかし、民俗調査では龍巻の目撃者に出会ったことはなく、私にも龍や龍巻についての知識が乏しいこともあって、とくにそれを意識して聞き取りをしたことはなかった。そのため、この稿を起こすまでには、長い歳月を経なければならなかつた。

### 龍の変遷

日本の龍の伝承はいうまでもなく中国から伝つたものである。十二支のなかで、龍は唯一の架空の動物であるが、伝來した当初から想像上の動物とされていたわけではなく、かつては実在を

---

\*日本民俗学会会員

信じられてきた。古い時代の龍については、多くの研究があるので、ここでは文献に表れてからの変遷を概観したい。

わが国で最初の龍の記録は、奈良時代天平勝宝8年(756)、聖武天皇追善供養のため、光明皇太后と孝謙天皇が東大寺へ奉納された正倉院御物の目録、『種々薬帳』に記録された「多都乃保欄」である。そのなかには、龍骨、白龍骨、龍角、五色龍齒<sup>1)</sup>などが記され、40種の薬物が今も保存されている。中国では古くから龍骨は万能薬とされてきた。正倉院の龍骨も中国からの移入品である。

『日本紀略』には、弘仁10年7月20日(819年8月18日)、「京中に白龍見エ、暴風雨有リ民屋ヲ損フ」と記している。これは日本での最も古い龍巻の記録とされている。『和名類聚抄』(10世紀前半)にも、龍、蛟、鰐の名が見える。また、『古今著聞集』(建長6年 1254)にも、延長8年(930)に龍巻が現れたと記されているが、300年も前のことをいっているので、気象学史料としては承認されていない。

龍巻の観測記事として最も古いといわれているのは藤原頼長の日記『台記』である。

久安三年七月二十一日(1147年8月19日)又簾中に候う。仰ぎて曰う去る六月晦(8月5日)  
龍の昇天を見る者多し。奏して曰う何を以て之を知る。仰ぎて曰う天に雲有り、其貌獸尾に  
似て其雲昇降すと。(読み下し)

獸尾上の雲が昇降したといい、龍巻を龍そのものとみていたことがわかる。

笹間(1992, p.78)によると、奈良時代の龍の形態は隋唐のそれに共通の形として表され、平安時代には日本の、鎌倉時代には宋元のような表現となり、南北朝時代には日本の要素が強くなる。室町時代にはさらに日本の感覚で表されている。今日の龍のイメージはほとんど桃山時代以降の表現のものである、と述べている。

江戸時代以降になると、龍巻の記録が多くなるが、龍巻を見れば龍の全体像がわかるというものではない。龍の姿を実際に見たものはいないはずであるから、龍の姿が時代によって変化するのは当然であろう。

わが国に龍のイメージが定着したのは、明の李時珍の著『本草綱目』(1596)が輸入されてからである。本書の刊行から11年後の慶長12年(1607)、家康の命を受けて林羅山(道春)が長崎でそれを入手し、家康に差し出した。『綱目』の影響はあまりにも大きく、わが国の本草学、博物学の発達を促した反面、それに捉れて近代化への障害になったことも否定できない(上野 1973, p.42)。

寛永14年(1637)以後、和刻の『綱目』が刊行されるようになり、博物学の知識が普及した。さらに、龍の知識は、日本最初の百科事典『和漢三才図絵』(寺島良安著 正徳3年 1710)が啓蒙の役割を果たした。それには、『綱目』を引用して、次のように書かれている。

形ニ九似有リ、頭ハ駱駝ニ似、角ハ鹿ニ似、眼ハ鬼ニ似、耳ハ牛ニ似、項ハ蛇ニ似、掌  
ハ虎ニ似タリ也。背ニ八十一鱗有テ、九九ノ陽數ヲ具フ。其ノ聲銅盤ヲ憂如ク、口ノ旁ニ鬚  
有リ、顎ノ下ニ明珠有リ、喉下ニ逆鱗有リ、頭上ニ博山有リ尺水ト名ク。其尺水無キトキ

ハ則天ニ昇ルコト能ハ不<sup>あた</sup>、気を呵シテ雲ヲ成シ、既ニ能ク水ニ変ズ、又能ク火ニ変ズ。其龍火湿ヲ得ルトキハ焰<sup>モエアガ</sup>リ、水ヲ得ルトキハ則燔<sup>ヤク</sup>ル。人ノ火ヲ以テ逐ヘバ即<sup>ヤ</sup>息ム。故二人ノ相火之ニ似リ。（下略）（読み下し、片仮名ルビは原文、平仮名ルビは引用者）

9似説の出所は、紀元後2世紀の王符の著書といわれるが、中国の別の書では「眼は兎に似」「鱗は鯉に似」ているとなっているものがあるので、その方が正しいようにも思えるという（中野1983,p.38）。

小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（享和3年—文化3年 1802—06）には、『綱目』を基に、蘭山自身の知見や観察を加え、和産の物品についても詳述している。龍については、「龍ハ神靈ノ物ニシテ親シク形ヲ見ルコトナリ難シ」と神秘的な動物で、目撃者がいないことを記している。そして、「夏秋ノトキハ忽チ風雨烈シク木ヲ抜<sup>ハ</sup>、瓦ヲ飛シテ、雷霆スルコトアリ、俗ニタツノ天上スルト云」と俗説では台風を龍の仕業とされていたことに言及している。

蘭山のような学者でさえ、龍の実在を疑いながら、完全にそれを否定することができなかつた。『綱目』の影響がいかに大きかったかを察することができよう。

### 龍の昇天—龍巻

『百姓伝記』という江戸時代の農業技術書がある。東海道の古老の経験した方法を筆記したもので、元禄（1688—1703）のころの成立という説もあるが、古島（1977下,p.203）は本書の内容から、「著書は慶長時代の岡崎領主本多家、その後裔で1645（正保2）年より1682（天和2）年まで遠州横須賀領主本多家を御当家とよぶ地位にあった人」と推定し、「この推定が正しければ、この書の著作年は本書中に記載される最新の年度である1680（延宝8）年から八二年の間」としている。

同書の「卷七 防水集」に、次のような記載がある（古島 1977下,p.218）。寛永年中（1624—42）、木曽川筋たつがみという所の堤で、付近の住民が集って水防工事を行った。淵の底にある松の根に縄をつけて、住民たちが引っ張ったが、少しも動く様子がない。もてあまして休憩しているとき、

俄に天気かわり雨降出す。人足も堤にあがりて居る処に、大雨しきりに、水増すやうに見へ、繩ゆるむかと見て、川上へただいたん上り、桑名の入江へ出るかとなり、古老の云、龍にて有べし。必、龍は海に千年、川に千年、山に千年すみてのち、天上するといへり。  
と龍の伝承を記している。

それに続いて、海中の龍が天上する例として、東海道で海水を巻き上げる龍巻があつたことをあげている（古島 1977下,p.219）。

正保年中（1644—47）の頃も、尾州熱田〔名古屋市熱田区 引用者〕の沖より龍あがり、名古屋近處千本松の南をすぢかい、古渡り〔名古屋市中区古渡町〕、三州さかい、伊賀いか井の村を通り、さなげ山〔猿投山 濑戸市—豊田市〕筋より信濃路へ上る。四月の頃にて有けるに、諸木にあたり、麦畑などはひしげ付けたる（おしつぶしくだける 古島注）やうになる。

諸木にあたり、ねじきりたる処には、血がつきてあり。村里の家をまきて（巻きあげて）は、二里三里のうちにすてたり。

『日本気象史料綜覽』(p.116)によると、正保年中に龍巻の記録はないが、正保元年（1644）7月29日、8月19・25・29日に、伊勢国で大風おおかぜ（台風）、大雨、洪水があった。この間に龍巻が生じたこともあり得ると考えられる。いずれにせよ、この記事は民間では、まだ龍が実在の動物と信じられていたことを語っている。

### 龍の尾－台風

龍巻と台風との関係について、事典から引用する（竹内 1986, p.351）。龍巻とは激しい空気の渦巻で、大きな積乱雲の底から漏斗状あるいは柱状に垂れ下がった雲に、地上では砂塵を、海上では水柱を伴うものである。龍巻の中の空気には、低気圧性の回転があり、北半球では反時計回りが多い。龍巻の発生には台風とも関係が深く、台風接近時28%、低気圧や前線の接近時58%，その他15%の割合である。そして、上陸した龍巻の約40%は台風を伴っているという。

平成5年（1992）から11年（1999）ごろにかけて、名古屋市の民俗調査を行ったとき、都市化の進んだ旧農村（中村区東宿町、港区小惟町）で，“オオカゼ（台風）は龍が尾でなでる”という伝承を聞くことができた（吉岡 2001, p.29）。台風や低気圧が近づいてきたときに起こる龍巻を、龍の昇天する姿と捉え、その後に続いてやってくる台風を龍の尾と昔の人は考えたのではないだろうか。

尾張・三河には、家の前に鎌を立てて、オオカゼを追う習俗があった。昭和50年代には、まだこれを見たり聞いたりした話者が多く、尾張平野の西春町では、ほぼ全域でそれを確認することができた（吉岡 1984, p.1144）。台風が近づくと、草刈り鎌（鋸鎌ではない）を長さ2間ぐらいの竹の先に付け、その刃を巽（辰巳、南東）に向けて、家の南側に立てた。この呪は魔除けの意味であって、「風を切る」「風を分ける」といわれていた。行われていたのは昭和初期までで、戦後は行われていない。

西春町では、昭和初期にはただ鎌を立てるだけのことが多かったが、大正初期には、屋外で拍子木を叩きながら、「ホーイ、ホーイ」と叫んでいる人を見たことがあった、と明治後期生まれの話者は語っている。そのころでも、拍子木を叩くのは中高年の人に限られ、昭和の初めごろまで、屋内で拍子木を叩いて「ホーイ、ホーイ」といっていた家があったと聞いていている。

名古屋市の旧農村部では、16区のうち5区（南区笠寺、中川区戸田、榎津、緑区大高、名東区引山、高針、天白区菅原）で、大正から昭和の初めごろまで、鎌を立てる呪いが行われていた。おそらく中区を除く全区の農家で行われていたと思われる。戸外で拍子木を叩いたり、叩きながら「ホーイ、ホーイ」と大声で叫んだ人（笠寺、戸田）、一斗罐を叩いた人（榎津）がいた。南区本星崎では、屋根の棟の両側に鎌を立てた家があったという（吉岡 2001, p.31）。

三河の安城市堀内町でも、台風が来ると鎌を立て、外に出て「ホーイ、ホーイ」と叫んでいた。拍子木を叩いていたかどうかは、話者の記憶にはないという（吉岡 1992, p.79）。

東海道には、台風除けの呪として鎌を立てる習俗があったことは、『百姓伝記』にも記されている。

俄に風吹、雨降出すときは、在家みな長竿を立、人々こゑを上で、雨風を追ふべし。其子細は、龍のとをる先へ、黒かも一つがい宛とをるなり。かもは水辺の鳥なる故、先々も水の有処へより処はをりず。家に竹を立て、こゑをたつれば、黒かも高く通るにより、龍も高く通、災難にあわざるものなり。依レ之俄風をち、雨ふるときは、何国の村里にも竿のさきに籠をつるし、また鎌などをゆいつけたち置、人々こゑを上げて風を追ふなり。(岩波文庫 上, p.220)  
文中の「何国」には、尾張、三河、遠江も含むと考えられる。「黒かも」は「かる」(カルガモ)ともいい、渡りをしない。その他のカモは冬にやって来る渡鳥(冬鳥)である、と説明している。  
これによると、鎌を立てたり、声をあげたりするのは、直接龍あるいは風を追うのではなく、カルガモを追うことになっているが、現在ではこのような伝承は聞かれない。

### 龍の爪痕－落雷

平成9年(1998)、名古屋市中村区東宿町で、かつてこのムラ(旧農村)の氏神、明神社の境内にあった松の木に落雷し、その幹が裂けて「爪の痕」といわれていた。この話をしてくれたKさんは、何の爪痕かはわからないという。

Kさんによると、隣リムラの横井町(中村区)では、雷が落ちた樹木の傷を「龍神様(あるいは龍)の爪痕」と呼んでいた。このムラには、雷が落ちたとき、笠を伏せて雷を生け捕りにした。雷はもう落ちないと約束したので、それ以来このムラには落雷したことはない、という伝説がある(吉岡 2001, p.32)。

これらの伝承は、落雷した木の皮が引き裂かれたようになっているのを見て、爪痕を連想したものである。話者は昭和6年(1931)の生まれであるから、雷が電気であることは知っているはずだが、「爪痕」というのは昔からの伝承であろう。江戸時代には、全国各地に、このような「爪痕」を雷獣の仕業とする伝承が記録されているが、尾張地方には報告されていない<sup>21</sup>。台風に伴って低気圧性の雷がしばしば発生する。龍巻、台風が龍によって生じる現象とすれば、昔の人が雷を龍と関連づけて考えたとしても不思議ではない。

尾張地方では、台風のときと同じように、

○雷の鳴る時には鎌を竹の先につけて立てておくと落ちない(市橋 1970, p.47)  
といわれたところがあった(地区名不詳)。また、筆者らの調査でも、三河足助町綾渡で、雷除けの呪として、萱葺き屋根の軒端に、鎌の刃を上向きにしてその柄を挿したと聞いている。これは台風除けの呪に発した習俗と考えられる。このようにみてくると、民間の人々のイメージにあった龍とは、龍巻－台風－雷などの自然現象が結びついた巨大な動物であったと推察される。

### 実在から架空へ

龍が実在する証拠の一つとされてきたのは龍骨である。小野蘭山(1802-1991, p.191)は龍骨に

ついて、龍自死の骨、龍の蛻骨<sup>3)</sup>、大魚骨などの説があり、何れが正しいかわからないといい、和産のものには、頭、角、肢骨があり、その形は同一ではない。土地の人は常と異なる骨を見れば龍骨あるいは蛇骨と称する、と述べている。

一方、18世紀末から19世紀初頭にかけて、讃岐、阿波、備前など瀬戸内海の海底から、漁師の網にかかってしばしば龍骨が揚っている。それをみて、本草学者はこれらの龍骨が動物の化石であることを、正しく認識するようになった。文化8年(1811)、小原春造は『龍骨一家言』を著し、龍骨の一部は象の化石と結論している(上野 1973, p.458)。

その後、本草学者は龍を架空の動物と考えるようになり、本草書から龍の記述は消えていった。しかし、封建社会では、本草学は特定の学者の知識であり、非公開であった(上野 1960, p.319)<sup>4)</sup>。そのため、民間では19世紀以降も、龍は実在すると信じられ、龍巻や台風などは龍に関連した現象とされてきた。

田口(1941, p.55)によると、明治9年(1876)8月5日の『東京日日新聞』に「大蛇上天、上申の写」なる記事があり、福岡県第五区長末永茂正なる人が、福岡県令(県知事)渡辺清に報告書を提出している。このような記事からみると、明治維新以後も、龍の実在を信じていた人が少なくなかったことがうかがわれる。龍が架空の動物となるまでには、まだ教育の普及を待たなければならなかった。筆者の尾張での聞き取り調査では、拍子木を叩いたり声をあげたりして台風を追っていたのは、明治前半期生まれの人までだったようで、昭和初期には、すでに呪いとして行われていたと推察される。もしそうであったとすれば、大正初期ごろまでに、龍はほぼ消滅したと考えられる。

## むすびー龍の生態

現在龍が実在すると信じている人はいない。とくに龍が龍巻や台風などの気象現象を起こすという伝承は、調査者がよほど注意して調査しなければ、出会う機会は少ない。私も龍には関心を持ってはいなかったが、天気俚諺などの聞き取りで、龍巻を目撲した話者には出会ったことがない。

だが、古文献には、龍が海から黒雲に乗じて昇天したという記録は少なくない。この稿を書きながら、20数年前に見た龍巻の状景を思い起こしてみると、地上と雲の間を結ぶ巨大な柱に、きらきらと光るもの(巻き上げた物体)は確かに胴体を覆う鱗のように見える。昔の人がこれを見て、龍が天に昇っていると信じたのはもっともある。ただ龍の上半身は雲の中にあることになっている。龍の形態についての記録が詳しくないのは当然であろう。

中国と日本、あるいは時代によって龍の形態に差があるのは、その頭頸部を見た人がいないこと、と、地方や時代によって人々の龍に対するイメージが異なるからであろう。三千年を経て天上するという『百姓伝記』の記事は、龍巻を観察する機会がまれであったことを意味すると思われる。

龍の尾なるものも、普通は見る機会がないが、ごくまれにはあったらしい。龍は湖、池沼、河

川, 滝にも棲むと信じられ, 日本では正平2年(1347)に猪苗代湖で龍巻が発生した記録がある(中央気象台, p.71)。『百姓伝記』(上, p.220)にも, 「日光山中禪寺の池」(中禪寺湖)に龍が棲み, 「日光しりきれ竜」と呼ばれていたことが記されている。これは面積の比較的小さい湖水などに発生した龍巻の下端が, 水面から離れたものであろう。

龍の生態について, 『本草綱目』では, 雲を生じ, 山海, 宇宙に逍遙し, 春は天に昇り, 秋には地に降りる, といっている。これは, 季節と関係なく海・山・川で三千年を経て天上する, 日本の龍とは多少生態が違うようである。日本では『綱目』が伝えられて以来, 歳月を経た後, 日本の自然環境に応じて伝承の内容が変ってきたとみられる。いずれの龍も風雨を支配する力があり, 民間では龍王・龍神として信仰の対象となった。

龍王・龍神に関する信仰, 雨乞いや止雨祈願などの呪についての報告や論考は多いが, 気象に関連した龍の民俗知識や俗信について述べたものが少ないので, 主に東海地方の文献や聞き取り調査をもとに私見を述べた。

## 注

- 1) これらの龍骨は鹿間時夫の研究により, 次のように同定されている。龍骨は鹿 *Cervus (Axis) punjabensis BROWN?* の角の断片が主で, 白龍骨は山西, 河南の三趾馬アカ土層出土の化石鹿 *Cervocerus navorossiae KHOMENKO* のものが主体である。龍骨もインド産の化石鹿の角である。五色龍歯というものは旧象 *Palaeoloxodon namadicus* (FALCONER et CAUTLEX) の歯である(上野 1960, p.69)。この旧象はナマディクスゾウ(ナルバダゾウ)と呼ばれ, 属名も *Elephas* に変更されている(亀井 1991, p.56)。
- 2) 『新修名古屋市史』7卷(p.32)では爪痕を靈獸か龍の可能性があることを示唆したが, 本稿では後者を探った。また尾張では, 中区古渡町付近(『日本靈異記』)や常滑市北条光明寺にも, 雷を捕えた話がある。
- 3) 蛇などが成長するに従って脱皮するように, 龍は脱骨して大きくなり, そのときに残した骨を龍骨とする説。
- 4) 蘭山は金錢を徵収して知識を伝授すること(例 松岡恕庵)を改めたが, 大坂(大阪)の木村蒹葭堂が蘭山に提出した誓盟状(誓約書)には, 本草学を止めるときには, 入門以来の書写記録などを一切返すなど, 学問の非公開を約束させている(上野 1960, p.319)。

## 参考文献

- 荒俣 宏 『世界大博物図鑑』3 両生・爬虫類 316-326頁 平凡社 1990  
中央気象台(田口龍雄)編 『日本気象史料綜覧』 地人書館 1943  
古島敏雄校注 『百姓伝記』上 (岩波文庫) 218-220頁 岩波書店 1977  
古島敏雄 「『百姓伝記』について」『百姓伝記』下 (岩波文庫) 197-214頁 岩波書店 1977  
日野 巖 『動物妖異考』192-209頁 養賢堂 1926 (復刻 有明書房 1979)

- 市橋 鐸 『俗信と言ひ伝え』 492頁 泰文堂 1970
- 磯野直秀 『日本博物誌年表』 平凡社 2002
- 亀井節夫編著 『日本の長鼻類化石』 築地書館 1991
- 中野美代子 『中国の妖怪』 (岩波新書) 29 - 108頁 岩波書店 1982
- 小野蘭山 『本草綱目啓蒙』 3 (東洋文庫) 191 - 194頁 平凡社 1991
- 李 時珍(木村康一他校定) 『新注校定 国訳本草綱目』 十冊 新註増補版 403 - 413頁 春陽  
堂書店 1976
- 笹間良彦 『図説 日本未確認生物事典』 78 - 80頁 柏美術出版 1994
- 田口龍雄 『風祭』 51 - 55頁 古今書院 1941
- 竹内清秀 「竜巻」『平凡社版 気象の事典』 351 - 352頁 平凡社 1986
- 寺島良安 『和漢三才図会』上 509 - 510頁 東京美術 1970
- 富田 均 「空に白虹、地に斐山」「龍の物語」(島田雅彦他) 57 - 76頁 新宿書房 1987
- 上野益三 『日本博物学史』 平凡社 1973
- 上野益三・高島春雄 『明治前 日本生物学史』 (日本学士院編) 1卷 新訂版 野間科学医学研  
究資料館 1980 (旧版 1960)
- 吉岡郁夫 「民間知識」『西春町史』 民俗編 「(名古屋民俗研究会編) 1115 - 1205頁 西春町  
1984
- 吉岡郁夫 「自然と民俗」「安城市堀内町の民俗」 (安城市堀内町民俗調査会編) 1 - 82頁 安城  
市歴史博物館 1992
- 吉岡郁夫 「自然と民俗」「新修名古屋市史」 (新修名古屋市史編集委員会編) 7卷 民俗編 9 -  
50頁 名古屋市 2001